

蛙が自らを歌った謡「トーロロハンロクハンロク」

大人の部〈口承文芸部門〉 光野智子

トロロ ハンロク ハンロク！

シネアントタ ムントウム ペカ テレケテレケアシ
ある日に、草原を飛回って

シノタシコロ オカヤシ アイネ インカラシアワ、
遊んでいるうちに見ると、

シネ チセ アン ワクス アパパケタ パイエアシ ワ
一軒の家があるので戸口へ行って

インカラシ アワ、 チセウブソッタ イキットウカリ
見ると、家の内に宝の積んである側に

チトゥイエアムセツ チシレアヌ アムセツ カタ
高床がある。その高床の上に

シネ オッカイポ シリカヌイエ コキブシレチウ
一人の若者が鞆を刻んでうつむいて

オカイチキ チララクス トンチカマニ カタ
いたので、私は悪戯をしかけようと思って敷居の上に

ロカシ カネ、「トロロ ハンロク ハンロク！ アリ ハンロク」
座って、「トーロロハンロクハンロク！」と

レカシ アワ、 ネア オッカイポ タム タララ
鳴いた、ところが、かの若者は刀持つ手を上げ

ウンヌカラ アワ、 サンチャ オッタ ミナ カネ、
私を見ると、ニッコリ笑って、

「エユカリ ネ ルウエ？ エサケハウエ ネ ルウエ？
「それはお前の謡かえ？ お前の喜びの歌かえ？

ナ ヘンタ チヌ」 イタク ワクス
もっと聞きたいね」というので

チエヌペツネ 「トロロ ハンロク ハンロク！ アリ ハンロク」
私はよろこんで「トーロロハンロクハンロク！」と

レカシ アワ ネアオッカイポ エネ イタキ
鳴くと、かの若者のいうことには

「エユカリ ネ ルウエ？ エサケハウエ ネ ルウエ？

「それはお前のユーカラかえ？ サケハウかえ？

ナ ハンケノタ チヌ オカイ」

もっと近くで聞きたいね」

ハワシチキ チエヌペツネ オウトウルン

私はそれをきいて嬉しく思い下座の方から

イヌンペ カタ テレケアシテク、

炉縁の上へピョンと飛んで、

「トロロ ハンロク ハンロク！」レカシ アワ

「トーロロハンロクハンロク！」と鳴くと

ネア オツカイボ スイ エネ イタキ

かの若者のいうことには

「エユカリ ネ ルウエ？ エサケハウエ ネ ルウエ？

「それはお前のユーカラかえ？ サケハウかえ？

ナ ハンケノタ チヌ オカイ」ハワシチキ、

もっと近くで聞きたいね」それを聞くと私は

シノ チエヌペツネ ロルニヌンペ

本当に嬉しくなって、上座の方の炉縁の

シツケウエタ テレケアシテク

隅のところへピョンと飛んで

「トロロ ハンロク ハンロク！」レカシ アワ

「トーロロハンロクハンロク！」と鳴いたら

アレクシコンナ ネア オツカイボ マツケ フミ

突然！ かの若者がパッと起ち

シウコサヌ、 ホントモタ シ アベケシ

上ったかと思うと大きな薪の燃えさしを

テクサイカリ ウンカウン エヤブキリ フミ

取上げて私の上へ投げつけた音は

チエモネトク ムッコサヌ パテクネテク

体の前がふさがったように思われて、それっきり

ネコナ ネヤ チエラミシカレ
どうなったかわからなくなってしまった。

フナクパケタ ヤイシカルナシ インカラシ アワ、
ふと気がついて見たら

ミンタラケッタ シネ ピセネテレケピ
芥捨場の末に、一つの腹のふくれた蛙が

ライ カネ アン コ アスルペウトウッタ オカヤシ カナン、
死んでいて、その耳と耳の間に私はすわっていた。

ピリカノ インカラシ アワ、 ウセアイヌ ウンチセヘ
よく見ると、ただの人間の家

ネ クニ チラムアブ オキキリムイ カムイ ラメトク
だと思ったのは、オキキリムイ、神のように

ウンチセヘ ネアウォカイ コ
強い方の家なのであった、そして

オキキリムイ ネイ カ チエランペウテクノ
オキキリムイだということも知らずに

イララアシ ルウェ ネアワン、
私が悪戯をしたのであった。

チオカイ アナク タネ タンコラチ トイ ライ ウェン ライ
私はもう今このようにつまらない死に方 悪い死に方

チキシリ タパン ナ テワノ オカイ
をするのだから、これからの

テレケピウタラ イテッキ アイヌウタラ オッタ イララ ヤン。
蛙たちよ、決して、人間たちに悪戯をするのではないよ。

アリ ピセネテレケピ ハウエアン コロ ライワ イサム
と、ふくれた蛙がいいながら死んでしまった。

出典：知里真志保を語る会「蛙が自らを歌った謡「トーロロハンロクハンロク」」『アイヌ神謡集
超入門』（2004）

一部のアイヌ語を音声に合わせて修正している